

山手台中だより ～希望に燃えて～



2026 年 7 月 2 号

山手台中の皆さんへ

校長 筒井 啓介

みなさんとは、年齢が離れているので、私の学生時代とは学校や社会の様子もだいぶ異なりますが、何か参考になることがあればと思い、私の経験を綴ってみました。読んでもらえると幸いです。

■中学生時代

私は JR 西宮名塩駅の側にある S 中学校に通っていました。当時は今のように学校の側には駅もなく（1982 年当時、福知山線は武庫川沿いを走っていました）、自宅からは徒歩で 5 分ほどかけて通っていました。長距離を歩くのは大変ですが、登下校時に友人と話したり、夏の暑い日には武庫川で泳いだりしていました。今から思えば、懐かしい思い出です。

中学校に入った 1 年生の時、担任の先生（とても迫力のある女性の体育の先生でした）が集会の時に、「生徒会を変えるために 1 年生から立候補者を出します」と宣言されました。そして、数日後の放課後に私と友人の二人が職員室に呼び出され、「クラスと学年全体で応援するから、必ず立候補するように」と言われました。突然のことで驚きましたが、二人とも「はい」（少なくとも私は気が小さく、嫌とは言えませんでした）と返事するしかありませんでした。そして、クラスと学年の応援もあり私は放送委員長、友人は書記になりました。それから、3 年間放送委員長を続けることになりました。もともとは、人前に立つことは苦手でしたが、この経験がきっかけで人前に立って話すことに自信が持てるようになりました。今から考えると、担任の先生の一言が私に貴重な経験を与えてくれたのだと感謝しています。

2・3 年生の担任は男性の理科の先生でした。私は理科部で部長をしていたので、この先生には大変お世話になりました。石鹼や合成洗剤、黒色火薬の実験など中学校の教科書には出ていない実験がしたいと言っても、とめることなく「よし分かった他の先生には内緒やで」と言って必要な資材を用意してくれました。（お礼に、部活で理科の授業の準備や片付けも、部員のみんなで取り組みました）中学 3 年生になって、進路選択の時期が来ました。私は将来の夢を持っていたかという、絶対にこれがしたいというものはまだありませんでした。しかし、高校で理系科目を勉強したいという思いで、市立 N 高校（夏の高校野球開会式で生徒がプラカードを持って先導する高校）へ進学しました。

■高校生時代

高校に入ると一気に生徒が増え（中学 240 人から高校 360 人ほど）、大変驚きました。また、自治会活動（中学でいう生徒会）の盛んな自由な校風の学校でした。（授業の教え方が難しい先生には自治会を通して、分かりやすく工夫するように抗議運動もありました）

ある時、友人から「物理部に入っているの、一度見に来て欲しい」と言われました。放課後に部室を覗きに行くと、アマチュア無線をしている部員がいました。私も、国家試験を受けて免許を持っていたので、英語で交信を呼びかけるとオーストラリアのメルボルンから応答がありました。下手な私の英語ですが、辞書を片手に会話をすることができました。この時、英語が喋れると役に立つと実感し、高校では英語を勉強するようになりました。

高校 3 年生になり、進路を考える時期になりました。私は先述の無線で海外と交信した経験から「目に見えない電波について学びたい」と考えて、工学部で通信工学について専攻することにしました。

■大学生時代

大学に進学して驚いたのは、高校の時までとは異なり、先生から教えてもらうのではなく、自分で学ぶ姿勢が重要になることです。講義では事前に予習をしていることが前提で、友人と一緒に図書館通いをして必死に勉強しました。研究室では「MBE 法による磁性薄膜結晶成長に関する研究」に取り組みました。超高真空装置を使って磁性薄膜をつくり、電子顕微鏡や X 線分析装置で薄膜を解析するような研究です。（この時、化学や数学の知識が役に立ちました。また、論文は英語で書くために役立ちました）大学院生と 2 人で実験し、忙しい時期は月の半分以上を研究室の床で寝起きをしながら実験を続けました。その成果が認められ、学会で論文発表の機会を与えていただきました。この指導教授は海外の出身ですが、苦労を重ねて戦後間もなく日本に国費留学をされた経験を持たれています。そのような経験から、私たちに「学ぶことの楽しさと厳しさを教えてくださった」と、今でも感謝しています。

■教師になろうと思ったきっかけ

私は小学 4 年生の頃、勉強が苦手で特に漢字が大嫌いでした。授業で毎回のように小テストがあり、間違えた漢字は 100 字帳というノートに 100 回書いて覚えることが課題とされていました。その課題が嫌で、いつも泣きながら放課後に練習していました。（時には逃げ出して帰ったこともありましたが）

しかし、5 年生で出会った担任が、「好きなことから勉強を始めたら楽しくなる」と声を掛けてくれました。それがきっかけで、算数と理科を勉強するようになりました。不思議なもので算数と理科で点数がとれるようになると漢字も自分で勉強するようになりました。このように先生の一言で生徒は変わるものだと思感しました。また、中学時代に会った先生のおかげで、人前で話すことに自信が持てるようになったこと。部活で自由に実験をさせていただき、理科に興味を持ったこと。大学では学ぶ楽しさと厳しさを教えていただいたこと。このような先生方との出会いがきっかけで教育に関わりたいと考えるようになりました。

大学で教員免許をとるためには、心理学や教育に関する勉強が必要ですが、私の専攻分野とは異なるため、普段は昼間の授業が終わってから夕方に教育に関する授業を受け、夏休みもほとんど授業に出ていました。

■中学受験「不合格」で良かった

親戚に教員が何人かいたこともあり、母親が私に中学受験をするようにすすめ、教育大学の附属中学校を受験しました。（当時は教師になるつもりは全くなく、公立中学校が荒れていたの、私は公立に行きたくなかっただけです）結果は不合格でした。でも、今から考えると地元の公立中学校に行ったら良かったと思っています。（公立中学で出会った先生の出会いが、教師になるきっかけになったから）

教員採用試験を受ける時期になって、中学受験で失敗したことが頭をよぎりましたが、採用試験に落ちてもしばらくは受け続けてみる覚悟をしました。そして、毎日大学に通う電車の中と研究室の実験の合間に勉強をしました。この時が人生で一番勉強した時期です。幸い、採用試験に合格することができ、大学卒業後に教師として教壇に立つことになりました。余談ですが、私が初めて担任したクラスの生徒に先述の大学教授のご親戚がいました。もう、教授は亡くなくなりましたが、人のつながりは不思議なものだと感じました。

最後に、山手台中の皆さんには「興味のあることから勉強をして欲しい」と「人との出会いを大切にしたい」と「努力は必ず結果に繋がる」とを、私のこれまでの経験から伝えたいと思います。最後まで読んでくれて有難うございます。



省略